陶芸の基本知識

陶芸とは、粒子が非常に細かい砂（土）に水を混ぜてできた粘土を、手やろくろなどを使って造り、それを高温の窯などで焼成して陶磁器を造る技術です。陶芸は、以下の順番で作業をしていきます。

1. 土練り
2. 成形
3. 乾燥・素焼き
4. 施釉・本焼き

1.土練り

最初に「土練り」という作業からからはじめます。陶芸用粘土のおもな要件には、以下の3つがあります。

耐火性があること…1,200℃以上の温度に耐えることが必要です。

可塑性があること…水を含むと粘り気を持っていることで、形を作ることができます。乾燥すると固まります。

収縮率が低い…焼き上がったときにおおむね15％程度収縮します。

「土練り」には、「荒練り」と「菊練り」という２つの方法があります。はじめに行う作業は「荒練り」です。

・荒練り

「荒練り」とは粘土の固さを均一にするもので、粘土の塊に両手で体重をかけて、前のほうに押し出し、伸びた部分を折り重ねて何度も練っていきます。

陶芸用の粘土は、通常ビニール袋などに入れて保存してあるので、蒸発した水分の影響で粘土の表面が湿っています。その湿って柔らかい部分と、中の少し固めの部分を練りながら硬さが均一になるようにします。

粘土の中に硬いダマが混ざっていると、作りにくいだけでなく、さらに窯で焼くときにヒビ割れなどの原因になる可能性もあるので、ここでしっかり練る必要があります。

・菊練り

「菊練り」とは粘土の中の空気を完全に抜くために行う作業で、荒練りをしてまとめた粘土を片手で押して、もう一方の手で回しながら練ります（菊の花びらのような形になるため「菊練り」と呼ばれます）。この練りは慣れるまでに時間がかかりますので、何度も繰り返して習得しましょう。

ここでは、プチッと空気の抜ける音が聞こえますが、この音がなくなるまで練ります。粘土の中に空気が入っていると、窯で焼いたときに空気が膨張し、作品が破裂してしまうことがあるので重要な作業です。

2.陶芸作品の作り方「成形」

ここでは、作品の作り方を紹介します。いずれの方法も、焼成後は粘土の中の水分が抜けて縮むため、少し大きめに作ることがポイントです。

・手びねり

手びねりとは、電動ロクロなどを使わずに手だけで成形することです。

陶芸の中で最も簡単な方法ですが、手作りならではの味わいや個性が出ます。

・タタラ作り

タタラとは板状の粘土のことで、そのタタラをさまざまな形にして成形するのがタタラ作りです。板状にした粘土を部品ごとに切り、組み立てあるいは型にはめて作ります。

・ろくろ挽き

ろくろ挽きは左右対称な円形の器なら何でも作ることが可能です。

ロクロ成形では最初に「土ごろし」と呼ばれる作業を行います。土ごろしとは、筒状にした粘土をロクロに乗せて、両手で粘土を挟みながら下から上に引き上げ、次に上から下に押し下げる作業です。この作業を繰り返していくうちに徐々に中心が定まり、厚みの均等な丸い器を作ることができます。

作品が完成したら「しっぴき」と言う紐で切り離して、ロクロの上に残った粘土で次の作品作りに取り掛かれます。

出来上がった陶芸作品は乾燥させて、生乾きになった時点で底の部分を、カンナを使って削り、再度乾燥させて素焼き→釉薬掛け→本焼きを行って完成します。